



異世界で怠惰な 田舎ライフ。5

α L P H α L I G H T

太陽クレハ
Jaiyo kureha

アルファライト文庫



ノア・サーバント

「クリムゾンの神剣」の二つ名を持つ。
王国最強「紅蓮騎士団」の団長。

リム

ガートリン家のメイド。
「アズライトの瞳」を持ち、
魔力の流れを
視ることができる。

ローラ

ユウリの母親
代わりのメイドさん。
何よりもユウリが大切に
弟のようにも
思っている。

リナリー

ユウリと付き合いの
長い冒険者。
正義感が強いしっかり者。
男性には奥手。

ニール・ロンアームス

はくしやくけ
ロンアームス伯爵家四男。
ユウリと同じ転生者。

アンリエッタ・ガートリン

ユウリの妹。
間組織ブラックベル所属。
【超絶】のスキル持ち。

ユウリ・ガートリン

ちゅうぎつ
【超絶】のスキルを持って、
異世界に転生した本作の主人公。
全てにおいてやる気がない。

登場人物紹介

characters

プロローグ

これは昔々の話である。

天界にもっとも知力に優れた、それは美しい天使がいた。

その天使の名前はアルカ・ファア・ルーシィー。

アルカは多くのことを知っており、その知識量は神すらも超えていた。それゆえ、アルカは夢見てしまったのだ。

神になることで永遠に生き続けて、知識を蓄え続け……全ての理を理解したいと。アルカは知識欲に囚われたのである。

——神になる方法。

そのためには「全知」と「全能」の二つの力が必要であった。

アルカは、生まれつき所有していた「賢者」のスキルにより、「全知」の力を得るため

の条件は満たしていた。

しかしもう一方の力、【全能】は数百年に及ぶ修練を積んでも手に入れることが出来なかった。なぜなら、その力に到達するための唯一の条件である【超絶】のスキルを獲得できなかったからだ。

そう、アル力は気づいてしまったのである。

力——すなわちスキルとは、魂に刻み込まれるものであり、その容量には限りがあるという事実。

つまり、自分はどんなに時間をかけて努力を重ねても、【賢者】と【超絶】を同時には魂の容量を超えて取得出来ないのだ。

アル力は苦悩し、絶望した。

おそらく、神はいつの日かアル力のような野心を秘めた者が現れることを予期して、盤石な手を打っていたに違いない。天使が神を超え、自分達の地位が揺らぐことのないように。

それからしばらく経ったある日。

アル力は神に宝物庫の整理を頼まれた。

そこでアル力は、その宝物庫にあったあるものに目を奪われた。それは、神が所有する

財宝の中では『金の林檎』と呼ばれるもので、その実を口にした者は不老不死の能力が得られると言われていた。

永遠の生命——。

それは、神への道を閉ざされたアル力の瞳には、またとない希望の光に見えた。アル力の内側から一度は諦めかけていた思いが再燃した。

気づくと、アル力は愚かにも懐に『金の林檎』を仕舞い込み、宝物庫から出ていた。

ところが、『金の林檎』を持ち出したことは、すぐさま神や天使達の知る事となる。

案の定、アル力は自分を追ってきた神や天使達に囲まれてしまう。進退窮まったアル力は、彼らに捕まる瞬間、『金の林檎』を一口かじった。

すると、変化はすぐに現れた。

アル力の美しかった美貌はみるうちに崩れ落ち、肢体は無残に歪み果て、瞳は暗い闇へ閉ざされた。

——彼女は思った。

こんな筈ではなかった。私はただすべてを知りたかっただけなのに……。

もう一度、はじめからやり直したい。

私をそんな蔑んだ目で見ないで……！

痛い。

痛い。

痛い。

嫌だ、こんなの嫌だ……！

必ず――。

必ず、復讐してやる！

それから数百年。

神と天使達は、力を増幅させて変わり果てた姿となったアルカと死闘を繰り広げ、ようやくその体を拘束し地下監獄へ幽閉したのだった。

しかし、膨大な知識を有するアルカは知っていた。

地下監獄から抜け出し、下界へ逃げ出す方法を。

……あの方法を用いて地下監獄を抜け出せれば――。

世界を生贄に、力を手に入れて――。

私を見下し蔑んだ神と天使達を殺して天界を滅ぼしてやる――！

そして、アルカは『魔王』と名乗り、世界に降り立ったのだった。

第一話 騎士学校でのひと時

俺は、ユーリ・ガートリン。

クリムゾン王国のガートリン男爵家の三男として生を受けて十二年。騎士学校に入學して六カ月が経とうとしていた。

そんな俺には、岡崎椿おかざきつばきとしての前世の記憶がある。それは異世界崩壊を食い止めるため、神様にチートスキルを渡されて無理やり転生させられたためだ。

とはいえ、俺以外にも転生者がいることが分かった時点で異世界崩壊を阻止するなどという役目は他に頑張ってもらい、俺はその手伝いを少しすればいいだろうと思っていた。しかし、俺の思惑おもひに反して面倒事ばかりが襲おそってくる。

希望の子とか言われるようになり、剣に魔法の修業の日々。そして聖具せいぐとかいう物騒な武器を使いこなせという無理難題むんだいを……。それから、これは異世界崩壊とは関係ないがガートリン男爵家の次期当主に任命されてしまった。正妻せいさいさんの実家が、国家転覆えんかくの反乱に加わったのがきっかけだ。反乱は未遂みすいに終わったものの、これを機に、正妻さんとその息子であるバズお兄様とカールお兄様まで、お父様はまとめて縁を切ることを決断した。

で、残った俺が領主様を継ぐという。

ふう、のんびりスローライフからどんな遠ざかっていくよ……。

次期当主に指名されてからというもの、騎士学校入学と共になくなったはずの、メイドのローラとの勉強会が復活した。勉強会の内容は貴族の立ち振る舞いや礼儀作法、舞踏会でのダンスレッスン、領地運営に至るまで幅広く、厄介やっかい極まりない。

ちなみに、今は自室で家具を脇わきに退かしてダンスの練習中である。

「ワンツー……ユーリ様、もつと足を踏み込んで！ 足に意識がいき過ぎて、腰が引けています。もつと堂々と」

ローラの刻むリズムに合わせて俺はステップを踏む。

「はあ……」

「ユーリ様。溜め息も仕舞っておいてください」

最近、ローラのスパルタ度が増している気がする。

しかし、ローラの万能感、半端はんぱないな。俺に教えるために密かにダンスの勉強をしているとか。

それから一時間ほど、ローラによるスパルタダンスレッスンは続いたのだった。

「くは……疲れたあ」

いつもはあまり使わない筋肉を酷使したせいだろう。剣術の修業よりも疲労感が強い。「ふふ。お疲れ様でした」

ローラが笑みを浮かべながらタオルを渡してくれる。

「ありがとう」

「少しずつですが、様になってきましたね」

「そうか？　へっぴり腰過ぎて、恥ずかしいんだけど」

「それは、これから練習していけば何とかなりますよ」

「そうかなあ」

「そうですよ。この前の舞踏会は隅で立っていたのですが、次に呼ばれた舞踏会までには会場の真ん中で堂々とダンスを踊れるように頑張りましょうね」

「ええ……!?　それは恥ずかしいって」

「いえ。ユーリ様が次期当主様としてしっかりといる姿を周囲に見てもらいませんと」

「やっぱさー。俺に次期当主は荷が重いと思うんだけどな」

「何をおっしゃいますか！　ユーリ様ほど相応しい人はおりません！」

「……そうかなあ……」

実はこの使用人に聞いても、ローラと同じ言葉が返ってくる。信頼されるのは嬉しい。だが、異世界崩壊を食い止めた後では、出来るだけラクに、楽しく、スローライフを送り

たい。そう、切に切に願っている俺の野望は、貴族という過重労働を押し付けられた時点で、もはや破綻寸前である。

はあ……俺は、一体どうしたらいいのだ。

ダンスの稽古が終わって、俺は汗を流すために風呂へやって来ていた。

それは木製の風呂だった。六人の男性が足を伸ばして入浴できるほどのサイズで、俵型のなめらかな曲線がとても美しい。以前、執事のクラランツの知り合いの木工店に依頼していたものが、つい最近完成したのである。店主曰く、風呂を作るのは初めてだそうだが、十分な出来だと思う。

俺は、ゆっくりと湯船に入っていく。

この風呂場は屋敷の使われていなかった部屋を貰い、魔法で大改築し、そこに木製の風呂をドカンと置いていた。俺一人で使うのは勿体ないので、使用人達にも自由に使う許可を出している。だが今はちょうど誰も入っておらず、俺の貸し切り状態だ。ちなみに、この木製の風呂と同様のものをもう一つ作り、そちらは女風呂として活用している。

「ふひい……極楽極楽ー。ぐふふ……最高だぜえ」

思わず独りごちながら、湯船で足をピンと伸ばして軽くバタつかせる。

俺の唯一の幸福な時間である。

これまで釣りで稼いだお金は風呂を作るために全部使っちゃったけど、本当に良い買い物したなあ……って、そう言えば、俺、金欠だった。

どうしようかな？

正直、屋敷にでっかい風呂を作った時点で、ほかに欲しいものはない。ただ問題なのは、聖具の修業を妖精の国の王女であるアリス様に見てもらう交換条件として、ケーキをワンホール用意しなくてはいけなくなっていることだ。

この異世界では砂糖の価格がかなり高く設定されているため、ケーキをワンホールも用意するとなると、今の懐具合だとなかなか厳しい。

やつぱり、もう一度、釣りにでも出かけて稼いでくるしかないかなあ。

そんなことをぼんやり考えていると、風呂場の扉が開いて誰かが入って来た。

「うい……坊主、入ってたのか？」

「ああ……デイルンか。仕事終わったのか？」

現れたのは俺に剣術を指南してくれている元冒険者のデイルンだった。俺に関わる仕事以外には兵士の訓練や屋敷の警備なんかも兼務している。

「おう。終わったぜ。ちよっと、風呂で汗流して酒だな」

「お酒はほどほどにね」

「分かってる。分かってる」

笑いながら答えるデイルンに、俺は疑いの眼差しを向ける。

「本当かな？ お酒の飲み過ぎは身体に良くないよ」

「分かった。分かった。気をつけるよ」

本当に分かってるのだろうか。半信半疑の気持ちでいると、デイルンが湯船に入ってきた。

「うい……最高だな、この風呂は」

「ハハ、俺に感謝しながら入るがいい」

「感謝感謝だぜえ」

「いい加減だなあ。あ……そうだ！ 今度また釣りやろうぜ。今俺、財布がすっからかんなんだ」

「俺は構わないぜ？ けどよ。坊主が作った『給湯器』っていう魔導具の技術を売ったら金になるんじゃないか？」

「ん？ ああ……あれね」

「すげえじゃねえか。この『給湯器』って魔導具は、ボタンに触れただけで冷たかった水が数分でお湯になるんだぜ？」

「ん……いいや。面倒臭いし」

この世界にない『給湯器』なんて魔導具を他の転生者が見たら、一発で俺が転生者であ

ることがバレちゃうだろ。

以前に作った『フィッシュアンドチップス』の場合は、この世界の技術水準でも違和感なく受け入れられるだろうと思ひ、金策に利用したのだ。

まあ……実際に他国には同じような料理があったらしいし。

余計な発明をして注目など浴びたくはない。まして他の転生者に関わるなんて、まっぴらごめんだ。現時点でニールだけでも面倒なのに……さらに厄介事に巻き込まれそうではないか。これ以上、俺の怠惰な田舎ライフが脅かされる要素には極力触れたい。それともう一つ。

この異世界に来て、いろんな場所を旅して思ったことなのだが、ここはとにかく自然が豊かで美しいのだ。そう、まさしく至るところ絶景しかない。

人間の生活は、技術の進歩によって確かに豊かになる。

しかしその反面、便利な物が増えすぎると、やがて人間はそれなしではいられなくなる。俺の前世の世界がそうであったように、行き着く先は息苦しいコンクリートジャングルだ。美しく、豊かな大自然に溢れたこの世界を、俺はそんなふうにしたくない。ちよつと、大袈裟かもしれないが。

「坊主に考えがあるなら、まあいいが」

「ああ……それでいいんだ。俺にも、いろいろ考えがあつてな」

この魔導具の存在は、お父様にも気づかれないようにしているし、知っている者はディランを含めたごくわずかな使用人だけである。

「それで、釣りは今週か？ 騎士学校が終わった後でいいな？」

「そうだな。それならローラのスパルタ勉強会もサボる口実が出来るし」

「はは、坊主らしい理由だな。まあ……坊主にも息抜きがあつたほうがいいと思つてたし。俺から誘つたことにしておいてやるよ」

「ほんととか？ ありがとう。頼むよ」

それから俺は湯船の中でのぼせそうになるまで、ディランと他愛のない話をしていた。

「眠てえ」

翌日、俺は騎士学校の屋上にあるベンチの上にゴロンと横になつていた。

春も深まってきたて暖かくなってきたので、昼の時間は屋上で過ごすことが多くなつていた。

「いい天気、いい天気」

空には雲一つない。昨日までの雨が嘘のように青く澄み渡っている。その空を可愛らしい緑色の小鳥が飛んでいた。視線を海に向けると、木の葉のように小さな船がゆつくりと横断していくのが見えた。

俺は大きく欠伸をする。幸せな気分がいっぱいだった。俺は今、この絶景を独り占め出来ているんだ。

そうしてのんびり空と海を眺めていると、突然、屋上の扉が開いて誰かがやって来た。「やっぱりここかいな」

「ふふ」

「なんだ？　ここは入ってもいいのか？」

俺は起き上がり、声が聞こえてきた方に視線を向けた。

そこにいたのはヘレンとロバート、そしてノーマンの三人だった。

「ダメなんやないかな？　生徒は。鍵掛かっているしな」

「ロバートが鍵抜け出来るのは分かるんだが、ユーリはどうやって？」

「ふふ、ユーリなら鍵の一つや二つ、簡単に開けられるでしょう」

彼らは俺と一緒に騎士学校に通っている友人達で、最近はいくく四人で昼飯を食っていた。

「ん？　来たのか」

俺は彼らの元氣そうな姿を見て、ふと先日のことを思い出していた。

ヘレンは関係ないのだが、ロバートとノーマンはカーニバルの際に起こった貴族の反乱に関わっていて騎士学校を三週間ほど休んでいたのだ。

ノーマンの父親は、その騒ぎに関わっていた責任の一端を負い断罪された。しかし、

ノーマンは自ら体を張って反乱を止めようとした功績が明らかになり罪を逃れることが出来た。そして今は、『クリムゾンの神剣』の二つ名を持っているノア・サーバント様の内弟子となり、彼の家で暮らしつつ騎士学校に通っている。

ロバートは反乱阻止の功労者でもあるし罪に問われることはなかったが、事件の落としどころが完全に決まるまでは、情報が外部に漏れないよう軟禁されていたのとか。

王国は、今回の反乱が賊によって洗脳された貴族達が起こしたと突き止めていた。そのため、見せしめとして主だった領主達とその親族は裁いたものの、それ以上の犠牲者が増えるのを好ましく思っていなかったようだ。そんな訳でロバートの父親も新領主の下で軽い奉仕活動に従事するという罪で許されている。ただ、父親が領地に帰ってしまったため、ロバート自身はヘレンのアルバイト先で働きながら騎士学校の近くで下宿していた。

「ユーリ、授業終わったらいきなり消えるんだもん。びっくりしたよ」

俺が少し考え事をしてしていると、ヘレンが話を振ってきた。

「ああ……早く屋上でのんびりしたくて、ちよっと急いでしたっただ」

「ちよっとつてレベルではなかったと思うけどね」

「はは。そんなことどうでもいいじゃないか。おっと、今机と椅子を出すよ。【ロックブロック】」

俺はレンガ造りの屋上の床に触れながら魔法を唱える。すると、円筒形のブロックがせ

り上がるように現れた。

「魔法の詠唱から発動まで一秒とかからないのか……」

「ユーリの魔法にいちいち驚いてたらきりない」

俺の魔法を見ていたノーマンが少しびっくりにした表情になる。そんなノーマンの肩をポンポンと叩きながらヘレンとロバートが首を横に振って論じた。

それから俺達は弁当を取り出して食べながら他愛のない話をしていた。そんな中、俺がぼそりと呟いた。

「それにしても、久しぶりに晴れたよな」

「ほんと良かったよ。私の家なんて特に浸水しやすい位置にあるから、家の中が水浸しになっちゃって大変だった」

「いや、どこも一緒やで。今回のアクア・マルタは大変やって。街中水浸しやった」

ヘレンとロバートの言った通り、ここ二週間はかなりの雨が降っていた。この異世界にも梅雨みたいなものがあるらしい。

アクア・マルタとは海から吹く風や大雨に満潮が重なって、水面が異常に上昇する自然現象のことだ。詳しくは専門家ではないので分からないが、王都ベネットはもともと水面までの距離が近いから、この時期になるとアクア・マルタが発生する可能性が高い。そう

なると街中はすっかり水に浸かってしまう。

「噂には聞いていたが、本当に街中が水浸しになるなんてな」

ノーマンが驚きの声を漏らした。この国に来て初めてのアクア・マルタだったらしい。

俺も初めは驚いたな。住んでいる屋敷は水に浸からなかったが、街へ出かけるにも膝まで覆う長靴を履き水深の深い場所を避けて移動するのだから。

俺が回想していると、ヘレンが何やら思い出したらしく話を振ってきた。

「あ……ユーリに言い忘れてたことがあったんだ」

「ん？ なんだ？」

「クリスト先生からの託けがあったね。ユーリは昼食後に学長室へ来い、だつてさ」

「クリストが……学長室に來いだって？ 何それ、嫌な予感しかないんだけど」

一体なんだろう？ 俺は首を傾げた。その理由について思いを巡らせてみるが、何も心当たりがない。とにかく、俺にとつて悪いことなのは確かである。

逃げる準備とかしておいたほうがよいだろうか？

「なんや、ユーリ。悪いことでもやったんやろ」

「む……俺は生まれてこのかた悪事なんて働いたことは一度もないぞ？」

ロバートが露骨に決めつけてきたので反論する。

「一発で嘘だと分かる返事だな」

すかさずノーマンが呆れた様子で突っ込みを入れた。
「ふふ。確かに」

「ハハ。それはそうやなあ」

ヘレンとロバートは笑い合う。結局、俺の反論は誰にも聞き届けられなかった。

昼休みも半分が過ぎた頃。

昼食を終えた俺は学長室の重々しい扉の前まで来ていた。

はあ……気が乗らない。このまま学長室に行かず逃げてもいいだろうか？

俺がノックするのを躊躇していると、突然、扉が開いた。

「さつさと入って来んか。小僧」

「へ？ ノア様？」

俺は、ノア・サバント様に引つ張られるように学長室の中へと引きずりこまれた。

彼は『クリムゾンの神剣』という二つ名を持ち、王国で騎士団長をやっているはずだが。

学長室に入ると、すでに俺と同じ転生者であるニール・ロンアームスの顔もあった。

「ユリ？ 君も呼ばれていたのか」

「ああ……ニールもか」

俺とニールが呼び出されたわけか……。この組み合わせが指名されて、いい思い出はな

いな。

「ほほ……お主ら二人を呼び出したのには理由があるんじゃない」

ノア様はそう言いつつ学長席に座る。

「その前に、ノア様はなんでここに？」

「ふおおお……前任の学長が、ちよつと遠くに行ってしまったな」

え……なんだ、その……失言したコメンテーターがすぐ替えられた時のような定番の理由は……。

由は……。

「それでな、王国の未来を担う人材発掘と育成のために俺が後任の学長になったというわけじゃない」

「な……ノア様は騎士団長としてお忙しいのでは？」

「ほほ。それは心配いらぬよ。もともと、預言で死を勧告されつつた身じゃて。ほとんど、

引き継ぎ済みじゃ。そうとなれば、じゃ。ここは若き王子のためにも俺の後継者となる人

間の育成に力を入れるべきだと国王に進言したまだよ。一応、形だけはまだ騎士団長の役

職には就いておるがな」

「はは。そうなんですか……」

ノア様もお歳ですし、学長なんて仕事は他の人に任せて隠居でもしたらどうですかね？
と、一瞬口にしそうになったが、殺されそうなので止めておく。



「俺もさっき聞いた時は、実に驚いたよ。これで騎士学校の風紀も正されるな」

ニールは少し笑みを浮かべながら言った。

何コイツ？ 優等生なの？ まじめ君なの？

「そもそも風紀が乱れてるのは貴族クラスだけだから。一般クラスはクリストによる強権的な政治支配で問題ないし」

俺がニールに指摘してやる。

ノア様は一回頷くと口を開いた。

「うむ。貴族クラスは風紀を整えて一から鍛え直す。一般クラスについては、クリストのしごきもまだまだ甘いのだな。儂直々に見てやることを考えておる。それから、お主らが二年になった頃合いを見て寮制度の復活も検討中だ」

「ノア様。その必要はないのではないのでしょうか？ 一般クラスは十分にハードタイプですよ？ これ以上のしごきは……」

「ふふ。他の生徒に関してはよいじやろうが、クリストの奴が小僧の相手は疲れたと言っておったのだな」

「うぶ……」

ニヤリと笑ったノア様に対して、俺は何も言えなくなってしまった。

「それで、私達が今日ここに呼ばれた理由を教えてくださいませんか？」

ニールの問いかけにノア様がゆっくりと答える。
 「そうじゃった。そうじゃった。ここからが本題じゃて……お主らは騎士交戦というものを知っておるな」

騎士交戦？ 聞いたことないなあ。何か、騎士のお祭りみたいなものだろうか？

ノア様の問い掛けに俺は首を傾げる。

だがニールは、そんな俺の反応をスルーして即答した。

「もちろんです」

「うむ。そうじゃな」

ニールの毅然とした返事を受けてノア様は至極当然といった顔で頷く。何故か二人の間で会話を完結させてしまっていた。

「ちょっと待ってください。騎士交戦とは、なんですか？」

「……」

「……」

俺の問いかけに二人は驚いた表情を浮かべた。

「君、本気で言っているんだよね？ 君、本当に騎士学校で授業を受けてるんだよね？」

「あ……ああ、一応な」

ニールはずいっと俺に顔を近づける。その顔に俺は思わずたじろいだ。

「本当に知らないのか……騎士交戦とは、クリムゾン、ルーカス、ボワセル、シャンゼリゼによる四カ国サミットの期間中に各国の騎士学校の代表者がお互いの実力を競い合うというものだ」

「あ……ああ……そういえば聞いたことがあるような……ないような？」

「掲示板に書いてあるのを見たことないか？」

「……ああ。そんなことあったかも。思い出した……確か、二年連続でクリムゾン王国が四カ国中最下位なんだっけ？」

俺がそう言った瞬間、ノア様の瞳に殺気が帯びる。

「……ああ、そうだ。君は良くないことばかりは、きちんと覚えてるんだな」

「あの、ノア様？ ものすごい殺気が出てますけど……？ 何かお気に障ることでも？」

ニールと俺はノア様の殺気に当てられて、会話しながらもビクツとなった。
 「ふおお……。農のいる国が二年連続で最下位……。主賓席で戦いの様を見ていた僕は、怒りを鎮めるのに苦労したわい。その上、国王から賜った苦言の数々……」

「ああ……なるほど」

ノア様……今、殺気を抑えきれないです。普通の人なら倒れているレベルですよ。その全身から立ち昇る負のオーラみたいなやつ、危ないから仕舞っておいてほしいのだ

「それでじゃな。このままでは僕も国王も腹の虫が治まらぬでな。汚名返上のために、お主ら二人を僕の独断で騎士交戦の代表者に選定した」

「はっ?」

「しかし、他の者にもチャンスを与える必要がある。したがって今後、お前達に対しての私闘を許可した。実力行使で一度でもお前達のどちらかを倒せたら、代表者を選定し直すように言っている」

「……」

「ふおお。今日から闘打ちには気をつけるんじゃない。絶対に負けるでないぞ」

ノア様は凄みながら言った。完全に脅しである。

それからすぐに解放されたが、俺は憂鬱な感情を抱えながら教室に戻った。



ノア様に騎士交戦の代表者に選定された話を聞いて三日。

俺は今、騎士学校にある修練場で【ブランク】の実技授業を受けていた。

「うぐう……」

「ぐあゝイテエ」

「ダメだ。勝てねー」

授業開始早々、俺に勝負を挑んできたクラスメートの何人かをあつさりと振り返りにする。彼らは床を這いずる芋虫のように呻き声を上げることになった。

心底迷惑な話だが、騎士交戦の代表者に選ばれて以降、こうした輩が後を絶たない。

「ほんと、可愛げのないガキだよ。お前は」

クリストが木刀を片手に近寄ってくる。

「何を言っているんだ。こんなにも幼気な少年を、大人達が寄ってたかってイジメて……」

恥ずかしくはないのか?」

俺は露骨にうんざりした表情でクリストに苦情を申し立てた。

「うるせえよ。さっさと始めるぞ。やられた奴らは脇に寄って休んでいろ」

問答無用と言わんばかりの態度でクリストが俺に木刀を突き付ける。

いつものパターンか……俺は半ば諦めつつ、木刀を目の前の相手に向けた。

お互いに構える中、特に合図もなく試合が始まる。

先手を打って攻撃を仕掛けてきたのはクリストだった。俺を打ち負かそうと、あらゆる角度から鋭い剣術を放ってくる。その容赦のない一撃を受け流しながら俺は、まったく大人げないよなあ……と、胸の内で毒づいた。

「はー!」

クリストは上段から、長いリーチを生かした斬撃を繰り出してきた。自信を漲らせて大口を叩くだけもあり、その剣の腕は技に磨きをかけたベテラン剣士の妙技そのものだ。その上、攻防パターンも豊富で驚かされる。ただし――。

「よっと」

現在では俺の身体能力が高くなりすぎてしまい、そんなクリストの剣すらも軽々と避けられるようになっていた。

俺に回避されてバランスを崩したクリスト。そのわずかな隙を見逃さない。すかさず反撃に出た俺の木刀が、クリストの首筋に突き付けられる。

「おしまいだね」

「く……」

納得がいかなと言った表情でクリストが睨んでくる。

おお……怖い怖い。

それにしてもクリストさんよ。あなた仮にも教師という立場なんだから、そんなマジな殺気は自分の生徒に向けちゃいけないと思うんですけど？

騎士学校の教師の面目を潰しちまって、悪いっちゃあ悪いんですが、これもなんているか、正当防衛？　ってやつなんで勘弁してもらえると……。

とはいえ、この構図はやっぱあんまりよろしくないか。

どうしたもんかな……俺が後始末に困っていると、どこからともなく声が掛けられた。

「そこまでじゃな」

聞き覚えのあるその声の持ち主はノア様だった。

クリストとの戦いで気づかなかったが、いつの間にか修煉場に現れたノア様が、飄々とした涼しげな表情で、何故か木刀を片手に持って立っていた。

「ノア様……」

「……何でこんなところに？」

クリストと俺は互いに木刀を引いて姿勢を正し、ノア様のほうに向く。ノア様は俺の質問を黙殺し、クリストをねぎらう。

「クリストよ。なかなかの剣技だった。鍛錬の成果が窺えたぞ」

ノア様はクリストの肩に手を置く。

「あ、ありがとうございます」

「うむ、お主もさらに精進するのじゃぞ。此奴は儂が直々に懲らしめてやろう。少し下がっておるのじゃ」

一方的にノア様が宣言すると、その鷹のような目を俺に向ける。

それは天下無双の武人だけが備えた視線だった。真正面から放たれた恐るべき殺気に、

俺の背筋^{せすじ}をかつてない緊張感^{きんじやうかん}が走り抜ける。

その場をクリストが離^{はな}れると、ノア様の威圧感^{いあつかん}がさらに増す。

ちよっとコレ、本気で怖いんですけど……俺、逃げてもいいですかね？

「小僧よ。そんな無手勝流^{むてかつりゆう}では、いつまで経っても剣術の熟練^{じゆれん}度は上がらないぞ？」

「いや……真剣にはやってるつもりなんですがね」

俺は頬^ほをぼりぼり搔^かきながらノア様に反論する。

しかし、どうにも歯切^{はき}れが悪い。ノア様の指摘もある意味では的^{まと}を射ているからだ。確

かに、俺の剣術の熟練度は【剣術（中）レベル10】から伸び悩^{なや}んでいた。剣術の中クラスのレベル10と剣術の大クラスのレベル1では、天と地ほどの隔^{へだ}たりがある。

まあ……俺は自分の才能の限界と諦^{あきら}めたいのだけど、どうやらノア様は許してくれないらしい。

「無意識に加減することを身体が覚えてしまったのかも知れぬな」

「では、どうすれば？」

「ほつほ。まったく面倒な奴じゃの」

「……あの、ノア様。面倒って、表情には見えないんですけど。どちらかと言えば、ウキウキしてませんか？ ……俺の気のせいですよね？」

「いやいや、本当に面倒じゃぞ。この儂^{おれ}が自ら剣術の極意^{ごくい}とは何たるかを叩き込んでやら

ねばいかんとはな！」

ノア様はそう言うや否^{いな}や、その場から一瞬で姿を消した……かに見えた。

いや、そうではない。ノア様の必殺の一撃が、目にも留^{とど}まらぬ速さで俺の脳天^{のうてん}を目掛けて振り下ろされていたのだ。

俺は危^{あや}うく瞬殺^{しゆんぱつ}こそ免^{まぬ}れたものの、勝負は実に一方的な形で幕を閉じた。

「イテテ……あの爺様^{じいさま}は、手加減^{てかへん}つてのを知らないのかね」

俺は頭に出来たたんこぶを撫^なでながら愚痴^{ぐち}を零^{こぼ}す。

相手が俺だからこそ、たんこぶくらいの怪我^{けが}で済んでいるが、常人なら頭蓋骨^{ずがいこつ}が陥没^{かんぼつ}していてもおかしくない。

まったく、とんでもない爺様だよ。

そんなことを考えながら、俺は修練場の床の上をなんとはなしにコロコロと転^{ころ}がっていった。

「……」

……べ、別に、負けて悔^くしいというわけではないぞ？

ただ、ちよっと今は、気分的に転がっていただけなのだ。

「……っ！」

だが天井を仰ぐ俺の脳裏には、ノア様の姿が焼き付いて離れない。
コテンパンに負けて悔しいだなんて、本当に俺は、これっぽっちも思ってたなんか……。

「……くそ！」

俺は胸の内側から湧き上がる思いを強引に打ち消し、知らず知らずの間にくだらない言い訳じみた考えで自分を誤魔化そうとしていた。

俺の口から今自然と漏れ出てしまった「……くそ」という言葉は、悔しいからじゃない。
……そう、ちよっとトイレに行きたくなっただけなんだ。

惨めな現実から目を背けるかのように、俺は床の上で無闇矢鱈と何度も寝返りを打つ。

「【ブランク】 以外の魔法が使えてたら、勝負は分らなかった」

事実、本当にそうなのだ。

これは負け惜しみや負け犬の遠吠えじゃない。

つまり、なんていうか、その……そう、客観的事実ってやつだよ！

王国随一の剣豪であるノア様が相手であっても、俺は時空間魔法とか氷魔法なんてすごい魔法が使えちゃうし。授業内の制約さえなければ、十分に対抗できていたはずなんだ。にもかかわらず、この胸の内側からじわじわと溢れてくる感情は何だろう……。

「はあ……虚しい」

その表現が的確かどうかは分からなかった。でも、言葉にするとそんなふうな感覚。俺

は自分の得意分野においては、誰にも引けを取らない絶対の自信がある。けれども、剣術ではノア様の足元にも及ばないのか……。

上手く説明のつかない虚しさに苛まれながら、俺は溜め息を吐き独りごちた。

そこへ突然、大勢の人間の足音が聞こえてきて、俄かに修練場が騒がしくなる。

「あ……アイツです！ ラント先輩」

どこかで耳にした声が聞こえてきた。俺が起き上がって視線を向けると、なんと総勢三十人くらいの騎士学校の生徒が集まっているではないか。

「なんだ？ 何か用？」

俺は嫌な予感に首を傾げつつ、ぞろぞろとこちらへ歩いて来る連中に問い掛ける。
すると、包帯で全身をぐるぐる巻いた変な奴が非難がましい言葉を発した。

「わ、忘れたとは言わせないぞ！ ……あ、あれ……？ さっきまでは平気だったのに、
なんだか急に……お腹が痛くなってきた」

「あー、昨日の学校帰りに、五人で俺を囲んで決闘を申し込んできた……ナルナル君だっけ？ アレ？ それともサバサバ君だっけ？ いや……チャット君だっけ？ えっと……何だったかな。ここまで出ているのに」

「ルフ・ナラディアだ！ 全然合っていないじゃないか！ う……くそ！ すみません、ラント先輩、コイツ締めてください……俺、先輩……ちよっと、トイレに」

俺と顔を合わせるや顔色を悪くしたルフは、腹を押さえて内股うちまたのまま修練場を出て行く。ああ……そう言えば、ルフには俺に近づくとお腹が痛くなる【呪】を仕掛けていたんだ。ルフがいなくなった修練場は妙な空気が流れていた。すると、ラント先輩と呼ばれていたスキンヘッドの奴はその場からいなくなったルフにツツコミを入れた。

「おい！ 本当にトイレに行くのかよ……!!」

「あの、何の用ですか？」

今度は俺がラントに尋ねる番だ。

その質問を待ってましたとばかりに、ラントは不敵な笑みを浮かべる。

「俺の可愛い後輩が世話になったようだなあ……？」

「ああ……まったく本当だよ。いい加減にしてくれないか？ 俺も暇ひまじゃないんだから。可愛い後輩なら、ちゃんと世話しておけよ」

俺は溜め息混じりにラントへ文句を返す。

ラントはスキンヘッドに血管を浮き上がらせて敵意を剥き出しにした。

「そういうことを言ってるじゃねーよ！ 話が噛み合わないな！ もういい！ やつちまうぞ！ 構えろ！」

ラントは周りの連中に目配せした。彼らはその命令を受けて俺とラントを囲うような態勢を作る。

その行動を見て、俺は顎に手を当てて感心する。

「ほー、なんだ、一対一でやり合うつもりか？」

「たりめーだろ。このラント様が年下相手に徒党を組むなんてそんな汚ねえマネ出来るわけねーだろ！ コイツらは、お前が逃げないようにするためのもんだ！」

「そうか……。つい最近さ、無意識のうちに俺が力を加減してるって指摘されたばかりだね。ちよっと、試しに本気を出してみようと思うから、気を引き締めてくれよ」

俺の中で、何やらふつつつと怒りに似た熱い感情が湧いてきた。……どいつもこいつも俺の平穏な生活の邪魔ばかりしやがって。まあ、ある意味、丁度いい八つ当たりの相手かもしれないな。

俺は先ほどまで使っていた木刀を拾い上げて構えた。

いつの間にか、さっきまで心に沈殿していた虚無感が消えている。

……とつと片をつけてしまおう。

奇声を上げて襲い掛かってくるラントに、俺は木刀を振り上げる。

——およそ数分後、修練場には三十人のむさ苦しい男達の屍の山が築かれることになった。

第二話 春休みは幻想のようなものだった

今日は騎士学校も妖精の国での修業も休み。

というか、春休みに入っていた。騎士学校の休みは日曜日以外では年に二回、春と秋に長期休暇がある。春休みは半月ほど、秋休みはおよそ一カ月間だ。

騎士学校の生徒達は大抵この時期に里帰りする。だが俺の場合は帰省に片道一週間くらいの時間が掛かるため、実家に顔を出すのは秋休みだけにしていた。

そんなわけで春休みの間は、王都の別宅で惰眠を貪ろうという素晴らしい計画を立てていた。

「ふああああ……お布団最高」

最近、新調した毛布の感触が心地好すぎて、なかなかベッドから起き上がれない。

まあ……いずれにしても今日は休みなので、布団から出る気はさらさらなのだけ。

ローラにも昨日のうちから「午前中は、ずっと部屋で休んでいるから」と言っている。

彼女は呆れながらも、渋々了承してくれた。

さて、もうひと眠りするかな……。

そんなことを考えていると俺の部屋のドアがノックされた。
トントントン。

「……」

俺は無視することを決め込み、布団に包まる。

「失礼します。あー、やっぱり寝てる」

この声は……リムか。

「なんだ、何か用か？ 俺は二度寝を楽しんでいる真つ最中だというのに」

俺は布団に潜り込んだまま、メイドのリムに問いかけた。

「ふふん」

「なんだ。その自慢げな声は」

俺は布団から顔だけを出して、リムに視線を向ける。

「少しだけあの籠手のことが分かってきたみたいなんだよ」

「は？」

「だから、少しなら『プシーカの籠手』を使いこなせるようになったって言ったの！」

「嘘か冗談のどちらだ？」

俺はリムの言ったことが理解できなくて聞き返す。ちなみに、プシーカの籠手は『聖具』と言われる七つの武器の一つである。

「違うから、本当にちよつと使えてるんだから」
 「マジ？ 嘘って言ってもいいよ？ 別に怒らないから」
 「マジだよ。あの籠手には、プシーカ・サン・シーという精霊が入っていて、放たれた魔法を吸収できる力があるんだよね」

「……」

「まだ魔法の吸収は下級魔法が限界みたいだけれどね」

俺は無言のまま布団の中に顔を突っ込み、芋虫のように丸くなる。

——嘘だ。

俺もリムと同様に『リアンの短剣』という聖具を持っていた。俺はリアンの短剣を使いこなせていないのに、俺より後に聖具を手にしたリムが先に使いこなすなんて……。

「嘘だあ」

「ほんとだよ」

リムとこんなやり取りをしていると、またもや部屋の扉がノックされた。

トントントン。

「んー？」

「失礼します。ユーリ様。お客様です」

俺が再び布団から顔を出して返事をする。するとローラがお辞儀をして部屋に入っ

来た。

「……俺は今日忙しいから、また日を改めてくださいと伝えてくれる？」

「そうだよ。ユーリは今日、私の買い物に付き合ってくれるんだもんねー？」

「……いや、リムよ。俺はそんな約束をした覚えはないのだけど」

「もちろん、今から約束すればかまわないよね？」

「リムよ。今日忙しいから、また日を改めてくれ」

「忙しい!? 私には惰眠を貪っているだけに見えるけど？」

俺とリムは二人してふざけた様子で軽口を言い合っていたら、ローラがビシツとした口調で諫めてきた。

調で諫めてきた。

「ユーリ様、リムさん、真面目に聞いてください」

「うわ……リムのせいでローラが激おこだよ」

「む……ユーリだって」

俺とリムが怒られたことに對してどちらが悪かったのかを押し付け合っていたら……

ローラの顔が冗談抜きに怖いものになってしまっていた。

「二人とも」

「……は、はい」

ローラに怒られて、俺は仕方なくそのお客様に会いに行くのだった。